

ジョルジュ・サンド「犬と聖なる花」第一部「犬」 ： 翻訳と解説

著者	平井 知香子
雑誌名	研究論集
巻	76
ページ	137-153
発行年	2002-08
URL	http://doi.org/10.18956/00006337

ジョルジュ・サンド「犬と聖なる花」 第一部「犬」

— 翻訳と解説 —

平井 知香子

〔翻訳〕 「犬と聖なる花」

第一部 「犬」 ガブリエル・サンドに

昔、わたしたちの田舎の隣人で、その名前がたびたび笑いの的となっていたひとりの男の人がいた。彼の名は犬氏（ムッシュー・ル・シャン、ムッシューは男性の敬称、ル・シャンは犬）。その名前ですべての人をおもしろがらせたり、子供たちがメドール（例えばポチ）とかアゾール（トンボの俗称）と呼んでも少しも腹を立てたりはしない風だった。

とてもいい人で、とてもやさしく、ちょびり冷たいところがあったが、性格は公明正大、愛想がよいと高く評価されていた。その人は、名前のほかは何にも変なところはないように見えた。だからある日、彼の犬が夕食の最中にいたずらをしてしまったとき、わたしたちはたいそう驚かされた。犬氏は犬をしかったりたたいたりしないで、犬をじっと見つめ、冷たい口調でこんな奇妙なおこごとを言ったのだ。

「ムッシュー、もしあなたがそんな振る舞いをするなら、犬でなくなるまでにまだまだ時間がかかりますよ。こういうわたしも犬でした。だからときどき自分のものでない料理に飛びつくほど食いしん坊になることもありました。でもわたしはあなたのように分別のつく年齢ではなかったのです。それに分かっておくれ、ムッシュー、わたしは皿を割ったことなんかまったくありませんでしたよ」

犬はこのお説教をおとなしく聞き入っていた。次に物悲しいあくびをした。それは主人の言うところでは退屈の印というより犬特有の悲しみの現れだった。それから、前足の上に鼻面を長く延ばして寝そべり、つらい反省の思いに沈んでいるように見えた。

わたしたちはまずこう思った。犬という名前をほめかしたのはわたしたちを楽しませようと機知のあるところを見せたかっただけなんだと。でも、重々しく自信たっぷりの様子で、前世の存在について考えたことはありませんかと尋ねられたときは、啞然とさせられた。

「何もありません！」とみんなは答えた。

犬氏はテーブルをぐるりと見渡し、それからわたしたちみんなが疑り深いとみると、手紙を渡しに入ってきて、事情が少しも飲み込めないでいる召使いの方をふと見た。

「では、あなた。シルヴァン」と犬氏は彼に言った。「あなたは人間になる前に何だったか覚えていますか」

シルヴァンは懐疑的精神の持ち主だが、からかい好きでもあった。

「旦那様」彼はとまどう様子もなく答えた。「わたしが人間になってからは、ずっと御者でした。御者になる前はたぶん馬だったのでしょ」

「なんてうまい答えだ！」とみんな叫んだ。

そこでシルヴァンは楽しそうな会食者たちの喝采を浴びてひきあげた。

「あの男はセンスと機知があるねえ」と隣人は答えた。「彼流に言うと、次の存在ではもう御者ではなく、こんどはたぶん主人になるのだらうね」

「じゃあ、あの男は召使いをたたくんでしょ。御者だったとき馬をたたいたんだから」と一人が答えた。

「皆さんのお望みのものをなんでも賭けます」と隣人は言い返した。「シルヴァンは馬をぶたないし、わたしも決して犬をぶたないってね。もしシルヴァンが残酷で残忍だったらよい御者にはならなかったし、主人になる運命もないというものですよ。もしわたしが犬をぶつなら、死後わたしはふたたび犬になる道をたどるでしょう」

たくみな理論に感心し、みんなは隣人にもっと詳しい話をするようせきたてた。

「それはとても簡単なことですよ」と犬氏は答えた。「ですからほんの少しの言葉で足りません。精神は、どう言ったらいいかなあ、精神の生命かな、それには法則があるんですよ。精神がまとっている有機物に法則があるように。精神と肉体はよく反対の傾向があるとされています。わたしはそれを否定します。少なくともこれらの傾向はなんらかの戦いの後、その舞台となっている動物（的な部分、すなわち肉体）を駆り立て、存在の階段を後にさがったり前に進んだりするよう合意するに至ります。一方が他を制圧するわけではありません。動物的生命は人が思っているほど有害ではないのです。知的な生命も人が言うほど自立してはいません。存在はひとつです。存在にあっては、欲求と精神的熱望は互いに答えあっています。これら二つの法則より強いもうひとつの法則があります。個人の生命の中に確立された正反対のものを一致させる三番目の言葉です。それは全体的な生命の法則で、この神聖な法則とは進歩のことなのであります。後ろへ後退してみると上に昇って進歩している真実が裏付けられます。したがって、すべての存在は本人の知らぬまに立派に変化したいという気持ちを経験するのです。だから犬や馬のように人間生活に密接に結び付いている動物はすべて、自由に生きている動物よりもっとそれを意識しているのです。犬をごらんください！そのことは他のどんな動物よりも犬

においてははっきり感じられます。たえずわたしと一緒にいたり、わたしの料理、わたしのひじかけ椅子、わたしの友人たち、わたしの車を好みます。もしわたしが許せば、わたしのベッドで眠るでしょう。わたしの声を聞くと、その声分かり、言葉を理解します。そのとき彼は完全にわたしが彼について話していることを知っています。彼の耳の動きを観察してみるといいです」

わたしは犬氏に言った。「犬は二つか三つの言葉しか理解しません。あなたが犬という言葉が発するだけであればビクッとします。それは本当です。でもあなたが考えを発展させると、犬にとっては理解のできない秘密が残るのです」

「あなたが思っているほどではありませんよ！彼は自分がかかわりがあることを知ります。自分が間違いを犯したことを思い出し、たえずわたしが彼を罰するか、それとも許すか目でたずねるのです。彼はまだ話せない子供ほどの知性は持っています」

「そういったことをぜんぶを仮定してみるのがお好きなんですね。なぜなら犬さん、あなたには想像力がおありですもの」

「わたしにあるのは想像力ではないんです。記憶なのです」

「ああ、それぞれ！」とまわりのみんなが叫んだ。「なんと犬さんは思い出すと言っているのです。自分の以前の存在について語る時ですよ。早く！わたしたち、聞いています」

「それはねえ」と犬氏は答えた。「終わりのない、そしてどこまでもごちゃごちゃした話になるでしょう。だから世界の始まりから今日に至るまでをすっかり思い出すつもりはありません。死には終わる存在とそれを受け継ぐ存在との間の関係をみごとに断ち切るという優れたところがあります。死が厚い雲を広げると、わたしという存在は変りつつあるという自覚もなく変化して消え去るのです。わたしは例外的にどうやら少し過去の記憶を持っています。その思い出を整頓するほど充分はっきりした考えはないのですが、いくつかの段階を飛び越えるのではなく、規則的に進歩の階段を昇ったかどうか、わたしの輪廻転生のさまざまな停留地を何度も再び始めたかどうかあなたに言うことはできないでしょう。それは本当にわたしの知らないことです。しかし、精神の中に生き生きとしたイメージが急にでてきて、ある時期にわたしが横切ったあるいくつかの場所が現れるのです。その時期はいつとは決められないのですが。そしてその時期にわたしが経験した感動や感覚を再び見いだします。例えばわたしが魚だった時いた川をつい最近になってたどり直したりするのです。なんの魚だったかって？知りませんよ！多分マスかな。なぜなら濁った水にたいする恐怖感と流れを絶え間なく逆上ろうとする情熱を思い出しますから。わたしはまた太陽が砕けた波の上に細かい網目模様やきらきら光るダイヤモンドのアラベスク模様を描くすばらしい印象を感じます。昔々…どこだったかは知りません！— その時いろいろなものは魚であるわたしのために名前がついてなく— すてきな滝がありました。月の光が銀色の打ち上げ花火となって戯れていました。わたしを再び押し上げる

波に向かって戦い、まるまる何時間もそこで過ごしました。日中は岸辺に金色やエメラルド色の羽虫たちがいて草の上を飛びかい、わたしはとても器用にそれらを捕まえました。この狩りは食欲を満たすというより、むしろ陽気な遊びだったのです。ときどき青い羽のトンボが飛んで来てわたしに軽く触れました。みごとな植物はその緑色の髪の毛の中にわたしをからめとりたがっているように思えました。しかし、自由に動きたいという情熱がたえずわたしを自由で早い水の流れのほうへ連れ戻したのです。動く、泳ぐ、早く、たえずより早く、そしてけっして休む事なく。ああ！それは陶酔です。わたしは先日いつもの川を泳いでいてあの良い時代を思い出しました。そして今、もうそのことはきっと忘れないでしょう！

「もっと、もっと！」と耳をすまして聞いていた子供たちが叫んだ。「あなたはカエルだったの。トカゲだったの。それともチョウ？」

「トカゲですか。分かりません。たぶんカエルだったかもしれません。しかし、チョウだったことはちゃんと覚えています。わたしは花でした。繊細にぎざぎざした白い美しい花、泉のほとりに垂れ下がって咲いているたぶん一種のつる性のユキノシタ。そしていつも喉が乾いていました。いつもね。わたしは水のほうへ身をかがめ、それに届くことができないでいました。さわやかな風に絶えず揺られていたのです。欲望は限りを知らない力です。ある朝、わたしは茎を離れそよ風にゆらゆらと漂いました。わたしに羽が生え、自由にいきいきとしていました。チョウは、要するに自然が発明し豊かにしようという気になっているお祭りの日に飛び立った花だったのですね」

「とてもすてきだ。詩ですね！」とわたしは彼に言った。若者たちは「犬さんが詩をつくる邪魔をしないで」と叫んだ。そして「笑わせませぬえ。あなたが石だった時、あなたは何を考えていたか言っていただけませんか？」と彼に話しかけた。

「石は無生物です。だから考えません」と氏は答えた。「わたしは自分が鉱物だった時の存在のことは覚えていません。でも、わたしもみなさん全員と同じ鉱物の存在だったのです。だから無機質な生命はまったく生きていないと信じるべきではないでしょう。岩の上に寝そべり岩に触れるとかならず何か特別なものを強く感じます。わたしが岩と古代からいろいろ関係しているはずだということは間違いありません。すべてのものは変移の要素です。もっとも粗野なものにもなお隠れた生命力があり、その鈍い鼓動が光と動きを呼ぶのです。人間は望み、動物と植物は憧れ、鉱物は待つ。みなさんのやっかいな質問から逃れるために、わたしのさまざまな存在の中から一番よく思い起こすものをひとつ選んで、わたしがどのように生きたかお話ししましょう。つまりわたしが犬だった最後の時に行動し考えたことです。劇的な冒険や奇跡的な救助など期待しないでください。おのおのの動物には自分独自の性格があります。みなさんにお伝えしようとしているのは性格の研究なのです」

燭台が来た。召使いたちが去ると沈黙が流れ、それから奇妙な話し手は次のように語った。

「わたしはかわいい小さなブルドックでした。純血種の、ネズミを捕る犬でした。ごく幼いころ別れた母のことも、わたしのシッポを切り、耳の先を細くけずる残酷な手術も覚えていません。こんなに切りぎざまれているわたしを人々は美しいと考えました。そしてわたしは早くからほめられるのが好きでした。記憶の一番古い頃から、「美しい犬」「きれいな犬」という語を理解していました。わたしはまた「白い」という語も好きでした。子どもたちがわたしを「白ウサギ」と呼んで大歓迎してくれた時、わたしは大喜びしました。お風呂に入るのが好きでした。しかし、どろ水に出くわすたびに暑さのため飛び込みたくなくて、泥だらけになってそこから出たものです。すると人々はわたしのことを「黄色のウサギ」とか「黒ウサギ」と呼んで、わたしを大いに辱めました。何度も身をもって経験した不愉快さがわたしに色の区別をかなり正確にするよう仕向けたのです」

「わたしの道徳教育にたずさわった最初の人には自分の考えを持っているお年をめした婦人でした。その人は仕付けのよい犬であることにはこだわりませんでした。お手をしたり戻したりする才能があることを強要はしませんでした。犬とはぶたれずにこれらを学びはしないと彼女はいつも言っていました。わたしはこの言葉がとてもよく分かっていました。なぜなら召し使いが女主人に隠れてときどきわたしをぶっていたからです。そこでわたしは早い時期から自分が保護されており、ご主人様のそばに逃れると結局なでて励ましてもらえらるだろうということだけ覚えました。わたしは若くてお馬鹿さんでした。棒を自分のほうへ引き寄せかじるのが好きでした。わたしが犬の生涯の間じゅう持っていた熱狂は、わたしの種族、わたしの顎の力、そして並外れて大きい口の開きに原因があります。あきらかに自然がわたしをむさぼり食うものとなりました。メンドリヤアヒルを大事にするよう教えられたわたしは、なにかと戦い、体質からくる力を費やす必要がありました。わたしは子どもでしたから、老婦人の小さい庭にたいへんな害を及ぼしました。植物の添え木を引き抜きました。しばしばそれといっしょに植物までも。庭師はわたしに体罰を与えましたがご主人さまはそうはさせませんでした。そしてわたしをわきに呼んで、とても真剣に話したのです。わたしの頭に手をやり目の中をじっと見据えながら何度も繰り返しました」

「あなたがしたことは悪いことなの。とても悪いことよ。これ以上悪いことはだれにもできないわ!」

「それでは」と彼女はわたしの前に棒を置き、それに触れることを禁じました。わたしが従うと、彼女は言ったものです。

「よろしい、とてもよろしい。いい犬ね」

「教育が犬に伝える良心というこの計り知れない宝をわたしの中に開花させるにはそれだけで十分でした。犬に才能があり、ぶつたりなのしったりして痛めつけられることがなかった時のことです」

「そこでわたしはこんなふうに威厳を感じとるセンスをたいへん若くして獲得したのです。その感情がなかったら動物も人間も本当の知性を発揮することはできません。恐れにしか服従しない者はけっして自分自身を制御できないでしょう」

「わたしは生後18カ月でした。そして若さと美しさのまっ盛りでした。女主人は住まいを変え、今後家族と一緒に住むことになっている田舎にわたしを連れて行きました。大きな庭があり、わたしはその自由さに夢中になりました。老夫人の息子に会ってからすぐ分かったことがあります。彼らがお互いに挨拶をしあっているやり方や彼がわたしにしてくれたもてなしで、そこに家の主人がいてその命令に従うべきであるということを理解したのです。最初の日から彼のすぐ後をひじょうにききわけよくとても確信にみちた様子について回りました。彼はわたしに目をかけ部屋に寝かせてくれました。若い妻のほうは犬があまり好きではありませんでしたのでわたしを必要とせず、いないほうが喜ばれました。わたしは控えめで、慎み深く清潔にすることで彼女に気に入られました。彼女は最高においしそうな料理をおいてわたしを一人にしても、それをちょっと舌の先で味見してみるということなどめったにおこりませんでした。わたしは食いしん坊でも甘いものが好きでもないばかりか、所有権を非常に尊重していました。わたしは人間扱いされていたのでこんなふうに話しかけられていました」

「これがおまえのお皿。水の椀。おまえのクッションと敷物よ」

「それらがわたしのものだぞ知っていましたので、取り上げられようものなら気分が悪かったです。でも、ほかの人の財産を犯すなんて考えたこともありません」

「わたしにはまた人々がたいそう評価してくれる性質がありました。ほとんどの犬が大好きな汚い残飯をけっして食べませんでしたし、その上に寝転がったりもしませんでした。もしも石炭の上に寝たり、あるいは土の上を転がったりしてわたしの白い毛色が黒くなったり黄ばんだりしても、不潔なもので汚れたのではまったくないと人々は信じることができました」

「わたしは人に評価される性質をもうひとつ見せました。けっして吠えませんでしたし、だれも咬んだりしなかったのです。吠えることは脅かしであり、侮辱です。たいへん賢かったので主人たちが挨拶し、もてなししている人々を礼儀正しく受け入れるべきだということが理解できました。そして、古い友人の再訪を喜んでいることを知らせる愛情の表現については、わたしはずい分気を配りました。だから、わたしは彼にじゃれることによって好意を示したのです。わたしはもっとうまくやったことがあります。こうした愛するお客様たちが目覚めるのを待ちかまえ、家の中と庭を案内して歓待したものです。ご主人様たちがわたしのかわりをしにやってくるまでこうしてお客さまを礼儀正しく案内して回りました。だれもわたしに教えようと思わず、一人で覚えたこのもてなしのことでわたしは感謝されたのです」

「家に子どもたちがいた時は、ほんとうに幸せでした。最初の子が生まれた時、人々はわたしが好奇心で赤ちゃんの匂いを嗅ぐかどうかちょっと心配していました。わたしはまだ激しい

ぶっきらぼうな気性がありました。わたしが残酷だったり嫉妬深かったりしないかと恐れたのです。そこで老いた主人はひざの上に子どもをだき、こう言いました」

「ファデにお説教をしなければなりません。なにも恐れることはありませんよ。ファデは人が言うことを理解できますからね」彼女はわたしに言いました。「ファデ、ごらんなさい。この赤ちゃんをごらんなさい。家の中でもっとも大切なものです。あかちゃんをよく愛するのですよ。やさしく触ってごらんなさい。じゅうぶん気を配ってね。どうです、ファデ、わたしの言うことがよく分かりますか？このかわいい子どもを可愛がるのですよ」

「それから主人は、わたしの目の前で子どもにキスし、やさしく抱きしめました」

「わたしは完全に理解しました。わたしはまた目と態度でこの愛するあかちゃんに口づけを求めました。おばあさんは、こう言いながらわたしをあかちゃんの小さい手に近づけました」

「そっとそっとよ、ファデ」

「わたしは小さい手をなめ、この子はとってもかわいいなと思いました。そのピンク色のほほを舌でなめずにはいられませんでした。そっと触れたのであかちゃんはわたしをこわがらず、それから少しして、わたしにはじめてほほ笑んでくれたのです」

「次の子どもが二年後にやって来ました。それで小さい女の子が二人になりました。わたしはすでに上の娘にとってもかわいがられていました。二番目の娘もおなじようにしてくれました。この子とじゅうたんの上と一緒に転げ回ることが許されました。両親はわたしが活発すぎるのをすこし心配していましたが、おばあさんから信頼の榮譽をたまわりました。いつもそれに値するよう心掛けていたものです。彼女はわたしに時々繰り返して言いました」

「そっと、ファデ、そっとよ」

「ほんの少しの非難もわたしに向けられることは決してありませんでした。どんなにはしゃいでいた時でも、子どもたちの手を赤くなるまで咬んだりはしませんでした。衣服を破いたり、顔に手をやったりすることも一度もありませんでした。しかし、神のみぞ知る。彼女らは小さいころよくわたしの善良さを悪用しました。わたしを苦しめるほどに。わたしは彼女らがしていることが自分では分かっていないのだと分かりました。だからけっして怒りはしませんでした。彼女らはわたしを園芸用の小さい車につなぎ、そこに人形を置くことを思いついたのでした！わたしは馬具をつけ車につなされるままになりました。どうなるか神のみぞ知るですよ。望まれるままかなり長い間車と人形をひっぱりました。自分の行為に少しうぬぼれがあったことを認めます。なぜなら召使いたちがわたしの従順さに感嘆したのですから」

「これは犬じゃないな」と彼らは言いました。「馬だ！」

「そこで一日中小さいおじょうさんたちはわたしのことを白い馬と呼んでいました。それがわたしをかぎりなく喜ばせたということを告白しなければなりません」

「わたしが他の人から受ける不正やおどかしに我慢できないわりには、子どもにたいして理

性的で優しいとって感謝されました。主人にいかにも友情を感じていても、一度わたしは自分の尊厳を保つためにどんなに苦心したか彼に証明したことがありました。外出を怠けて、清潔さにたいして過ちを犯したのです。すると彼はわたしを鞭でおどしました。わたしは反抗し歯をむきだして飛んでくる鞭に身を隔らせました。彼は実に遠慮した人でしたから、わたしをしつこく罰したりはしませんでした。そしてだれかがこの反抗を許すべきではない、さからう犬は手ひどくなぐるべきだと彼に言いました。すると彼は答えました」

「いいえ、わたしはあいつを知っています。攻撃には大胆で頑固な犬です。屈服しはしないでしょう。そうなればわたしは彼を殺す羽目になり、むしろ報いを受けるのはわたしの方でしょう」

「だから主人はわたしを許してくれました。それでいっそう彼が好きになりました」

「わたしは祝福されたこの家の中でとても穏やかな、とても幸福な一生を過ごしました。みんなが愛してくれました。召使いたちは優しく、わたしに十分敬意を払ってくれました。子どもたちは大きくなってもわたしが大好きで、あくまでも優しく、とってもうれいことを言ってくれました。ご主人たちは実際にわたしの性格を評価してくれました。わたしの愛情が変わりやすいとか、食いしん坊になるとか、低俗な熱狂にもおちいったりするといったこともまったくなくと断言してくれたのです。わたしは彼らとのつきあいが好きでした。だからわたしが年とりその結果感情を表に表すことが少なくなっても、彼らの足元や、彼らがわたしのためにドアを開けるのを忘れた時は、ドアのところで眠りながら友情を示したものです。たった一人である時、全然監督されていなくても、わたしは非の打ち所のない謹みと礼儀作法を身に付けていました。けっしてドアを爪でひっかいたり、激しいうなり声をもらしたりはしませんでした。はじめてリューマチにかかった時、わたしは人間のように扱われました。毎晩ご主人は動物でわたしをくるんでくれました。もしそれを思いつくのが少し遅れたときは、彼を見つめながら、彼のそばに立ちつくしていました。彼を引っ張ったり、しつこくしてうんざりさせることはありませんでした」

「わたしの犬としての存在において、唯一非難されるべきことは、他の犬にたいする好意がほとんどなかったことです。次の種への分離を予感していたからでしょうか。もっと上のグレードへの昇格が遅れるのを恐れたためでしょうか。彼らの粗野さや悪徳をわたしに憎ませたのは、彼らの仲間に入ると再びあまりにも犬的になりすぎるのを恐れていたためでしょうか。犬が知的道徳的に劣っていることを軽蔑する傲慢さがあったからでしょうか。実際わたしは彼らを一生こきおろしました。そしてわたしは似た者にたいして極度に意地悪だとしばしば人々は宣言しました。しかし、名誉のために言わなければなりません、弱いものや小さいものに害をおよぼすことはまったくありませんでした。もっとも大きくもっとも強いものには勇敢な大胆さをもって攻撃しました。疲れ果て傷だらけで戻り、やっと直ったかと思うとまた同じことを

始めていました」

「わたしは紹介されなかったものとはこのようにつきあいました」

「家の友人が犬を連れてきたときのことです。わたしに礼儀を促し、もてなしの義務を呼び覚ましなが、まじめなお説教をされたことがありました。犬の名がわたしに告げられ、その顔がわたしの顔に近づけられました。わたしが最初のうなり声をあげるのを家人は優しい言葉でなだめたので、わたしは自尊心を取り戻しました。そこで永久に対決は終わりとなり、もう争いはなく、挑発さえありませんでした。しかし、わたしが大きな友情を抱いていた羊飼いのメス犬（ムトヌ）は、わたしにつかかってくる犬からわたしを守ってくれましたが、彼女を除いてわたしの種類のどんな動物ともけって親しくありませんでした。犬たちはすべてあまりにもわたしより劣っていると思ったのです。美しい猟犬や、本能を抑制するような罰を強いられる曲芸をする犬さえもです。わたしはいつも優しく言い聞かされていましたので、他の人がいるときはともかく、自分自身だけを危険にさらさねばならないような点では、他の犬と同じように熱狂の奴隷となったとしても、人間には柔順で社交的でした。なぜならこうすることが気に入、ほかのようにすることは恥だと思ったのです」

「一度だけわたしは恩知らずのようにみえたことがありました。そのことでわたしはとても苦しみました。伝染病が国に大きな被害を与えた時です。家族のみんなが子ども達を連れて行ってしまいました。悲しませてはいけないとわたしには何も言われませんでした。ある朝、わたしは召使いと残されました。この人はわたしにはたいそう気を配ってくれましたが、自分のことで頭がいっぱいで、しいてわたしをなぐさめることはしませんでした。あるいはやりかたを心得ていなかったのかもしれませんが。わたしは絶望しました。この厳しい冷たさによる人気がない家はわたしには墓のようでした。わたしはもともと大食いではありませんでした。が、完全に食欲を失ってしまい、あばら骨がみえるほど痩せてしまいました。ついにわたしにはとても長いと思えた一時期の後、老主人が家族の帰宅の準備のために再び戻ってきました。それで、わたしは彼女がなぜ一人だけ戻って来たのか分かりませんでした。息子や子どもたちはもう二度と帰って来ないと思いました。そこで彼女にほんの少しのやさしさを示す元氣すらなかったのです。彼女は部屋に火をともしました。そして、わたしを呼んで暖まりにくるよう誘ってくれました。次にいろいろな命令を与えるために書き始めたのです。そして彼女がわたしの話をしているのを聞きました」

「ではあなた、この子に食べ物をやらなかったの？ひどくやせているわ。パンとスープをこの子のために取りに行ってください」

「でもわたしは食べることを断りました。召使いはわたしの苦しみを話しました。老いた主人はわたしをよくなでてくれましたが慰められませんでした。彼女は子どもたちが元気でまもなく父とともに帰ってくると言うべきだったのです。彼女はそんなことは思いつきませんでしたし

た。だからわたしの冷淡さを理解しないで嘆きながら遠ざかりました。しかし何日かたって彼女が家族を連れて戻ってきた時、わたしは再び評価を取り戻しました。とくにわたしが子ども達に示した愛情によって、わたしが忠実で感じやすい心を持っていることをよく証明したからです」

「わたしが年とった日々に、太陽の光が人生を美しく照らしていました。家の中に小犬のリゼットが連れてこられました。子どもたちはまずこの犬を奪い合いました。しかし上の子が妹にどんな新しい知人よりわたしのような古い友達のほうがいいと言って譲りました。子犬のリゼットはわたしに親切でした。そのはしゃぐ子供時代はわたしの冬の季節を陽気にさせたのです。彼女は神経質で、横暴でした。残酷にもわたしの耳をかじりました。わたしは叫び声をあげましたが、怒りはしません。リゼットは激しくはしゃいでいてもとても優雅なものでしたよ！彼女はわたしをむりやりに一緒に走ったり跳ねさせたりしました。しかしわたしの大きな愛情は結局、小さいお嬢さんにたいするものでした。リゼットよりもわたしのほうを好んでくれ、おばあさんがしたみたいに、わたしに道理と感情と道徳を語ってくれたのですから」

「最後の日々と死のことは覚えていません。静かな心遣いや励ましの中で息をひきとったのだと思います。人々はたしかにわたしが人間に値すると理解していました。というのもわたしに欠けているのは言葉だけだといつもも言っていたからです。けれどもわたしの精神がこの深淵を一挙に越えたかどうか知りません。わたしの再生の形と時期については知らないのです。しかし犬の存在をもう一度やり直さなかったと思います。なぜならあなたがたにお話ししたばかりの存在は、昨日のことにように思えるからです。わたしが今日見ている風習、習慣、考えはわたしが犬であったとき見たり、観察したりしたものと本質的には変わらないからです」

隣人の真剣な話ぶりにわたしたちは注意と尊敬をもって聞かずにはいられなかった。彼はわたしたちを驚かせ興味を引き付けた。彼の存在の何か他の話をしてくれるよう彼に頼んだ。

「今日はもう十分です」と犬氏はわたしたちに言った。「思い出を集めるよう努めます。そしてたぶんもっと後でわたしの前世の他の物語をあなたがたにしてあげましょう」

【解説】

本稿はジョルジュ・サンド George Sand (1804-1876) の晩年の童話「犬と聖なる花」“Le Chien et la fleur sacrée” (1875)¹⁾ の第一部「犬」を翻訳したものである。犬がペットとして、あるいは「人間の最良の友」として取り上げられることが多くなった今日、人間と犬との関係を描いたこの作品は、われわれ現代人に何らかの示唆を与えてくれるのではないだろうか。

ジョルジュ・サンドは1875年(亡くなる前の年)の夏、現在『祖母の物語』 *Contes d'une*

Grand-mère の下巻にある童話のほとんどを一気に書いている。そしてその最後の作品が「犬と聖なる花」である。同一の語り手による二つのコントからなり、その第一部が「犬」「Le Chien」、第二部が「聖なる花」「La fleur sacrée」と題されている。第一部については、同年8月16日の『備忘録』に「わたしはロロ（孫娘）に彼女の犬のフッデの話を読んでやりました。彼女に頼まれ昨夜書き終えたお話です」とある。このコントは下の孫娘ガブリエル・サンドに捧げられている。不公平にならないよう、第二部は上の孫娘オーロールに捧げられる。これについては、8月19日に「象のために研究をし始めました」、8月29日「象のためのメモが終わりました。3ページ書くために20冊の本を読むでしょう」、9月4日「わたしの白象のお話が完成しました」などとある。また家族にこのコントを読んだ時、孫娘たちが象の死に涙を流したことを「なんとという成功でしょう」と記している²⁾。こうして書き終えられた「犬と聖なる花」は翌月10月1日に『両世界評論』誌 *Revue des deux Mondes* に掲載され、死後出版となった『祖母の物語』の下巻に収められた。第二部の「聖なる花」についての詳細は次の機会に譲り、今回は第一部の「犬」を中心に見てみたい。

I. 児童文学における犬

犬は児童文学の歴史の中で様々に描かれてきた。そこでサンドが描いた犬の位置づけを行うために、これまでどのような犬がとりあげられてきたか一瞥してみよう。

1) かわいそうな犬

まず最初に思い浮かぶのは貧しい孤児に寄り添う犬である。ウィーダの『フランダースの犬』（イギリス、1872）³⁾ や H・マロ『家なき子』（フランス、1878）にでてくる旅芸人の犬カピなどの哀れを誘う犬がいる。サンドと同時代に描かれたこれらの犬たちは労働力として人間に使われる〈奴隷の犬〉であった。主人公の傍らにいて死ぬまで恩人に忠誠を尽くすタイプである。社会的弱者としての子ども像をさらに強調する役目を果たす。もの言わぬ動物が耐える姿は読者の涙を誘わずにはおかない。動物文学の古典的キャラクターと言えよう⁴⁾。

2) 名犬

犬が生き延びるためには人間と仲よくし、〈家犬〉として生きる道がある。20世紀アメリカの児童文学には実話をもとにした動物文学があった。A・Pターヒューン『名犬ラッド』（1919）、E・ナイト『名犬ラッジー』（1940）などである。これらの忠犬は、賢く、勇敢で、人間を助け、励まし、人間と喜びを分かち合う仲間であり、家族の一員でもあった⁵⁾。

3) 野生の犬

人間に忠実な存在として描かれた〈家犬〉と正反対に野生に生きる犬がいる。C・ドイルの『バスカビル家の犬』（イギリス、1901-1902）の魔犬は〈野生の犬〉のままで人間を恐怖に

陥れた。家犬から野生の犬になった犬もいた。J・ロンドン『荒野の呼び声』（アメリカ、1903）は南国でペットとして飼われていた犬が北国で野生に目覚め狼になるという、有名な先祖返りをたどる動物文学の傑作である⁶⁾。

4) ファンタジーの犬

またファンタジー文学にも犬は登場する。L・Fボウム『オズの魔法使い』（アメリカ、1900）のトトはファンタジーの国の道先案内役をつとめた犬である。P・ピアス『まぼろしの小さい犬』（イギリス、1962）のチキチトは少年の心の中に住み着き、まぼろしとなって主人公を理想と現実のはざまにさまよわせた〈ファンタジーの犬〉であった。芥川龍之介の童話「白」（1923）や大石真の「見えなくなったクロ」（1962）の犬もこの種類に分類される。

5) 冒険する犬

冒険漫画、エルジェ『タンタンの冒険旅行』（ベルギー、1947）⁷⁾などの冒険シリーズで、少年を助ける犬スノーウィ（フランス語版ではミルウ）がいる。伝統的な動物ファンタジーの流れを汲みながら、生き生きとした活動性から、フランダースの犬のような従来の感傷は免れている。ジョルジュ・サンドの「犬」に出てくる犬はこれらの種類に照らしてみると一体どのようなタイプに属するのだろうか？

II. オフェリア

サンドのデビュー作『アンディアナ』 *Indiana* (1832)⁸⁾には象徴的な犬オフェリアが登場する。この作品はサンドが「ジョルジュ・サンド」というペンネームを使って単独で書き、たちまちベストセラーとなった話題作である。

ヒロインのアンディアナが物語の中ではじめて発した言葉：《あなたこれを殺さないでください (De grâce monsieur, ne la tuez pas)⁹⁾ . . .)》は一体何を意味するのだろうか？

ブルボン島出身のクレオール女性であるアンディアナは年の離れた夫に従っているが彼を愛することができない。夫がある日妻にたいする不満を飼い犬オフェリアにぶつけようとしたとき、妻の口からでたのがこの言葉であった。オフェリアはその後アンディアナがブルボン島から船で脱出しようとしたとき、その後を追って海に飛び込む。しかし、残忍な水夫によって殺されてしまう。波間に漂うオフェリアの死骸。この哀れな犬の死についてベアトリス・ディエ *Béatrice Didier* がシェークスピアの『ハムレット』のヒロインとの関連から水と死のイメージがあると指摘している¹⁰⁾。アンディアナは当時の結婚制度のもとで夫の奴隷となっていた。彼女の犬もまた「フランダースの犬」と同様死の運命をたどる〈奴隷の犬〉であるとみなすことができるであろう。ではサンドはなぜこのような残酷な場面を描くことができたのであろうか。伝記的作品「わが生涯の記」 *Histoire de ma vie* (1854) につぎのような記述があ

る。

1824年の春、わたしは原因を言うこともできない大きな憂鬱にとらえられた。原因はすべての中にあり、またどこにもなかった。ノアンは改良されたが混乱した。家は習慣が変わり、庭は様子が一変した。秩序は既になく、最下級の汚い犬たちは殺され、役立たない年とった馬たちは売られた。一言で言えばすべてが刷新されたのだ。確かにより良くなった。夫はそれらすべてに没頭し満足した¹¹⁾。(下線は筆者による)

アンドレ・モロワ André Maurois が伝記『ジョルジュ・サンド』 *Lélia ou la vie de George Sand* 13) の中であげているこの夫カジミールによる庭の改良は小説の第一ページに出てくる「犬を殺さないで」という妻の声の中に凝縮されている。当時ナポレオン法典は結婚制度において妻を法的無能者とみなし不当な奴隷状態においていた。サンドはカジミールとの結婚でそのことを身に染みて感じたのだった。事実オフェリアという実在していた犬と夫の暴力についての記述も『書簡集』第4巻、1837年10月8日ヴェンサン Vincent 宛の手紙に見られる¹³⁾。不幸な結婚の象徴とも言うべき庭の改良の記憶は、別の形で晩年の『祖母の物語』の第一作「コアックス女王」“La Reine Coax” (1873) にも出てくる。マルグリットが熱病の蔓延のために涸れた庭をフランス式庭園に変えた冒頭の場面である。祖母はその改良によって昔の思い出が消えたと悲しむ。野生の庭と人工の庭との対立がこの作品のテーマのひとつもなっていた。このように結婚当初の犬を含む庭の改良の記憶はサンドにとって極めて悲痛な思い出であったと言える。

Ⅲ. 『書簡集』の中の犬

サンドはある日、孫娘にせがまれて犬をテーマとするムッシュー・ルシヤン M. Lechien (ムッシューは男性の敬称、ル・シヤンは犬、以後犬氏とする) の物語を書くことになった。このユーモラスな名前の人物は、前世では犬であり、ファデ Fadet と呼ばれていた。『書簡集』によるとファデはサンドの晩年に実在していた犬である¹⁴⁾。この名を作品中に使用したのは孫娘たちを喜ばせるためだったのであろう。コントの中には年老いたファデが小さい犬をこころよく迎える場面があるが、『書簡集』にもよく似た場面があり、このコントが実際の出来事から発想を得ていることが分かる。ファデというのは代表作『愛の妖精』 *La Petite Fadette* (1848) にちなんだ名前、ペリー地方で「妖精」を意味する語であり、サンドの関心のありかをよく示している。サンドは得意の絵筆をふるってこの犬を描いている。赤いシールで封印された手紙を口にくわえ、喜び勇んで主人のところにもって行く愛らしいファデの姿である。また緑豊かな自然の中で、二人の孫娘と犬が遊んでいる絵画も残されている¹⁵⁾。し

かし、1875年頃のフデだけがコントのモデルになったわけではない。1829年4月19日か20日付けの夫宛の手紙にコントの犬を思わせる記述が見られる。息子モーリスがブラーブというピレネー犬に小さい荷車をつなぎそれに乗って遊んだ話である。これはコントの中の犬が車をひいて「馬車」と呼ばれたエピソードに一致している¹⁶⁾。

サンドはもともと犬が好きだったらしく、友人や家族にあてた書簡の中でもたびたびこの動物にふれている。そのひとつにショパン Chopin の友人のグジマール Gzrymala がサンドに犬を贈ったときの次のような手紙がある。〈Le chien et son Lambert sont arrivés. Ce chien est superbe, gentil à croquer, bon enfant. (Nohant, 30 août 1846)〉グジマールがサンドに贈った犬を、画家のランペールが彼女の故郷ノアンまで連れて来たのであった。この子犬が自分のしっぽをぐるぐる追いかけたという例のショパンの「子犬のワルツ」〈ワルツ変=長調〉の犬なのだろうか¹⁷⁾？もしもサンドが犬好きでなかったら、あの名曲も生まれなかったかもしれない。

『書簡集』には、このほか家で飼っていた犬の話が数多く見られる。反対に猫はそれほど好きではなかったようだ。猫の画家として知られているランペールに、彼女は「わたしは猫は絵しか好きではありません。絵の中の猫はわたしにとって喜びです。少しも悪さをしませんから。だからたくさん描いてね」などと言っている¹⁸⁾。このようにサンドは鳥や馬などと並んで犬には格別の興味を抱いており、もっぱら家庭において犬との交流を楽しんでいた。すなわちノアンで飼っていたさまざまな犬たちの思い出が作品のヒントとなって「犬と聖なる花」の第一部「犬」が描かれたのだと言えよう。

Ⅳ. 犬氏

犬氏の犬は夕食の最中に人の料理を食べ皿を割ってしまう。犬氏はしかったり、たたいたりするかわりにじっと犬を見つめ次々にお説教をする。

もしあなたがそんなふう振る舞うなら、犬でなくなるまでにまだまだ時間がかかりますよ。こういうわたしも犬でした。ときどき自分のものでない料理に飛びつくほど食いしん坊になることもありました¹⁹⁾。

犬氏はその名前が示すとおり前世では犬であった。召使いのシルヴァンも「御者であり、御者になる前は馬だった」と言う²⁰⁾。会食者たちが「御者だったとき馬をたたいたんだから、主人になったら召使いをたたくんだろう」と言うと、犬氏は「わたしが犬をぶたないようにシルヴァンは馬をぶたない。もし彼が残酷で残忍だったら良い御者にはならなかったでしょうし、

主人になる運命もないでしょう。もしわたしが犬をぶつならわたしの死後再び犬になる道をたどるでしょう」と答える。ここで奨励されていることは、他人のものを奪ったり、暴力をふるったりしないこと。すなわち野生をコントロールし、「しつけのよい」ことが進化の条件となるのだ。当然このしつけは暴力によるものでなく、買い主の愛情によって行われなければならない。こうして「よい犬は人間に進化する」、「よい馬はよい御者になる」。

これらの前世と進化に関する観念は19世紀思想の大きな流れの中から生まれた。サンドはもとルッソー J-J Rousseau (1712-1778) の影響で自然や生命に関心を抱いていたし、同郷の友人 J・ネロー Jules Néraud (1795-1855) に植物学の手ほどきを受けていたこともあり、リンネ C. von Linné (1707-1778) の分類を知っていた。進化論の立場で書かれたデュフォン Buffon (1707-1788) の『博物誌』も愛読していた。晩年まで持ち続けたこれらの自然科学の知識により『祖母の物語』には孫娘の教育のために植物、昆虫、鳥、動物、鉱物などの知識がちりばめられることとなった。また当時のキリスト教的 세계観にも神を頂点とする「自然の階段」(scalnatrae) の考え方があった²¹⁾。少女時代に宗教的教育を受け、のちに宗教家ラムネー Lamennai (1782-1854) や、社会思想家ルルー P・Leroux (1797-1871) の進歩思想 (progrés continue, 人類は絶え間無く完成にむけて前進する) にも深く傾倒したサンドが進化論に興味を持ったのはごく自然のなりゆきだったのだろう。19世紀における生物進化論は主に前半はラマルク J. B. Lamarck (1744-1829)、後半はダーウィン Carles Darwin (1809-1882) などによって提唱された。サンドは晩年にダーウィンの「種の起源」*De l'origine des espèces par voie de sélection naturelle* (1859, 仏訳は1862年, 1871年) を読み、「進化論」darwinisme に熱中したという。また読書から「聖なる花 (インドの白象の名前)」に見られるような東洋的な輪廻思想にも共感したと推測される²²⁾。

V. 肉体と精神

『祖母の物語』の第一作の「コアックス女王」の結末で、肉体の象徴である蛙の死と精神の象徴である白鳥の飛翔は、肉体に対する精神の優位を告げていた。同様の傾向は「勇気の翼」“Ailes de courage” (1872) にも認められ、主人公のクロピネが海鳥となって消えたことを暗示する結末に精神の優位性が伺える。ダーウィンの進化論の影響が見られる「埃の妖精」でも、精神と肉体の問題が取り扱われ、さらに掘り下げられている²³⁾。そしてこの作品のすぐ後に書かれた「犬と聖なる花」の「犬」では次のように描かれている。

精神と肉体はしばしば反対の傾向をもっていると言われていました。わたしはそれを否定します。少なくともこれらの傾向はなんらかの戦いの後、その舞台となっている動物(的な

部分、すなわち肉体)を駆り立て、存在の階段を後にさがったり前に進んだりするよう合意するに至ります。一方が他を制圧するものではありません。動物的生命は人が思っているほど有害ではないのです。知的な生命も人が言うほど自立してはいません。存在はひとつです。存在にあっては、欲求と精神的熱望は互いに答えあっています。これら二つの法則より強いもうひとつの法則があります。個人の生命の中に確立された正反対のものを一致させる三番目の言葉です。それは全体的な生命の法則で、この神聖な法則とは進歩のことなのであります²⁴⁾。

ここで精神と肉体の対立にサンドはきっぱりと反対していることに注目したい。つまりこの二つは「全体的な生命の法則 la loi de la vie générale で一致している」のであり、その法則こそが「進歩」la progressionなのである。若い頃から悩んでいたこの精神と肉体の対立の問題は『祖母の物語』の最初では未だ対立の傾向が見られたが、「埃の妖精」をへて進歩の階段を進み、ついに最後の作品「犬」において決着し、一致したのであった。フッデは年老いてやがて死を迎えるが、再び犬氏として生まれかわる。幸福な結末である。初期の〈奴隸の犬〉はもはやどこにもいない。「犬」における犬は前記の分類では〈家犬〉に属していたが、野生を克服し、しつけのよい〈名犬〉となって進化するのだ。

以上見てきたようにサンドの犬のテーマは、過去の記憶を逆上ることにより生命の連鎖につながっていると確認するところにある。そして生命は完成を目指して「進歩の階段」l'échelle de progressionを上り続けるのである。しかし人間がその最高の位置を占めるのではない。人間もまた進化し続ける。オーロール版『祖母の物語』の解説者ベルティエ P・Bertier はサンドのこの結末を「楽天的なロマン主義的ユートピア」と定義している²⁵⁾。結局サンドの「犬と聖なる花」の第一部に登場する犬は空想的な進化論に基づいた〈ファンタジーの犬〉であったと言えるであろう。そして「犬と聖なる花」という奇妙なタイトルについての疑問、「なぜこの二つの作品をひとつにまとめたか」もおのずと解けたように思われる。このことを証明するにはさらに詳細な検討が必要であるが、筆者の考えでは「犬」は肉体を「聖なる花」は精神を象徴している。そしてこの二つを一つの作品としてまとめたことは意味のないことではなかった。存在はひとつであり、絶えることなく続いている。これこそが死を前にしたサンドの最後のメッセージであった。

【註】

1) George Sand, "Le Chien et la fleur sacrée", *Contes d'une Grand-mère*, t. II, Editions d'Au-

- jourd'hui, 1977 George Sand, "Le Chien et la fleur sacrée", *Contes d'une Grand-mère*, Deuxième série, Editions de l'Aurore, 1982 (引用はこのテキストによる) 原稿はバリの歴史図書館所蔵。《Monsieur Le Chien》という未発表の原稿もある。
- 2) George Sand, *Agendas*, V, Jean Touzot, 1993, p. 299, p. 302, p. 303, p. 304
 - 3) 「奴隷の中の奴隷、人間にこき使われる犬、引き具をつけて車のかじぼろを引く動物でした。」(ウォーダ『フランダースの犬』 畠中尚志訳、岩波少年文庫、1957、pp. 12-13) 『世界・日本 児童文学辞典』、定松正、玉川大学出版、1998、pp. 188-189
 - 4) Ibid., p. 278
 - 5) Ibid., p. 265, p. 266
 - 6) 前掲書『世界・日本 児童文学辞典』、p. 185
 - 7) Ibid., p. 144
 - 8) George Sand, *Indiana*, Classiques Garnier, 1962
 - 9) Ibid., p. 29
 - 10) Béatrice Didier, <Ophélie dans les chaînes: étude de quelques thèmes d'Indiana> in *Hommage à George Sand*, Presses universitaires de France, 1969, pp. 93-100
 - 11) George Sand, "Histoire de ma vie", (*Œuvres autobiographiques II*, Pléiade, 1971. N^e partie, pp. 38-39
 - 12) André Maurois, *Lélia ou la vie de George Sand*, Hachette, 1952, pp. 73-74
 - 13) George Sand, *Correspondance*, Classiques Garnier, t. N, 1968, p. 46, p. 210
 - 14) George Sand, *Correspondance*, t. XXIV, 1990, p. 620-621
 - 15) Christian Bernadac, *George Sand Dessins et aquarelles*, Belfond, 1992, pp. 181-183
 - 16) George Sand, *Correspondance*, t. I, 1964, p. 518, t. II, 1985, p. 95
 - 17) George Sand, *Correspondance*, Suppléments (1817-1876), t. XXV, 1991, p. 484, p. 484
 - 18) George Sand, *Correspondance*, t. XXIII, 1989, p. 277
 - 19) Op. cit., "Le Chien et la fleur sacrée", p. 67
 - 20) Ibid., p. 68
 - 21) 「絵でわかる進化論」徳永幸彦、講談社サイエンティフィク、2001、pp. 9-12
 - 22) 「蝶の羽の重さ—画像にこめられたメッセージ」国際シャルル・ペロー研究所長ジャン・ペロー、 畑中圭一訳、国際児童文学館紀要第17号、2002、第8回国際グリン賞受賞記念講演、p. 72
 - 23) 拙論「ジョルジュ・サンド「埃の妖精」—解説と翻訳—」関西外国語大学研究論集第74号、2001
 - 24) Op. cit., "Le Chien et la fleur sacrée", p. 69
 - 25) Philippe Bertier, op. cit., *Contes d'une Grand-mère*, t. II, p. 16